ひ　ろ　ば

生化学若い研究者の会「第64回 生命科学夏の学校」開催報告

石本　太我[1]，相京　辰樹[2]
（[1]実行委員長・熊本大学，[2]事務局長・広島大学）

はじめに

本稿では，2024年8月30日（金）から9月1日（日）にかけて開催した「第64回 生命科学夏の学校」について報告します．生命科学夏の学校（以下，夏学）は，日本生化学会後援のもと，「生化学若い研究者の会」が毎年夏に企画する日本最大級の若手研究交流会であり，「これからの生命科学研究を牽引する人材の育成やネットワークの構築」を目的として，半世紀以上にわたり開催されてきました．分野を代表する研究者を招いた講演会，活動地域や大学・分野の垣根を越えた若手研究者同士の交流会などを企画しています．最先端の研究動向の把握，若手研究者同士が互いに切磋琢磨できる関係の構築といった，研究室にいるだけでは得難い機会を本研究会は提供します．

第64回 夏学コンセプト「集え!! 祭りだ!!」

本年度の「第64回 生命科学夏の学校」では，「集え!! 祭りだ!!」をキャッチコピーとしました．ひと時の夏休みに若手研究者が集い，活発な交流ができる機会を提供することは弊会の基本理念でもあります．そのため，多様なバックグラウンドをもった若手研究者たちの活気ある交流と，普段の生活では得ることのできない人脈や知識の形成に資することを狙いとしました．さらに交流会の趣旨として，参加者自身が自分を表現し，他の参加者と触れ合う中でまた自分自身を見つめ直す機会を提供する会にしたいと考えました．この理念を実践するため，講演・参加者交流企画に加えて，参加者全員のフリートークであるフラッシュトークや，シンポジウムでは視聴者参加型のパネルディスカッションを企画しました．

また，イメージデザインにおいては，第64回夏学のコンセプトである「集え!! 祭りだ!!」にマッチした絵柄のイラストレーターの協力を得ることができました．これにより，多くの人々が集い，楽しんでいる様子を，洗練されたデザインをもって表現することができました．親しみやすいイラストは，より効果的な宣伝・広報につながりました．

台風10号の影響を受け，やむなくオンライン開催に切り替えましたが，コロナ禍を機に発展したオンラインツール，弊会で培ってきたオンライン企画のノウハウを駆使し，現地開催に劣らない臨場感を提供することができました（図1）．

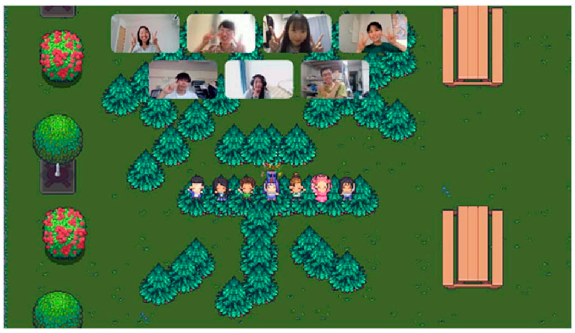

図1　オンラインツールを用いて参加者が交流する様子

刺激あふれる多彩なワークショップ

本年度のワークショップでは，生命科学の各領域の第一線で活躍されてきた4名の先生をお招きしてご講演いただきました．「小胞体ストレス応答」，「ミクログリアの役割」，「ソフトマター物理からみた相分離」，「化学プローブの設計・活用」など，基礎研究から応用との接点まで幅広く多彩なテーマを取り上げました．いずれの講演においても，初学者にとってわかりやすいようにお話しいただき，さらに先端の研究まで丁寧にご説明いただきました．オンラインではありましたが，参加者を交えたディスカッションも大変盛り上がりました．また，それぞれの講演には先生方の研究哲学が隈なく散りばめられており，若手研究者のモチベーションを大いに刺激する時間となりました．

キャリアのリアルを考えるシンポジウム

多くの若手研究者にとって，将来のキャリアパスは悩みの種となっています．本年度のシンポジウムでは，「研究のモチベーションとキャリアパス」をテーマとしました．二部構成とし，第一部では講演を，第二部ではグループワークおよびパネルディスカッションを実施しました．

第一部の講演では，海外での研究，企業への就職，出産や育児といった多様なキャリアを経験された3名の講師にご講演いただきました．

第二部では，まずは学年の近い参加者をグループにまとめて，それぞれのグループでキャリアについて語り合ってもらいました．このグループワークで出てきた質問や思いは，参加者全体で共有しました．さらに，これらの若手研究者の生の声を踏まえて，講師の先生方からコメントをい

ただくパネルディスカッションを行いました．パネルディスカッションでは，ウェブツール（Slido）を使用し，参加者がリアルタイムにコメントを発信・閲覧できる仕組みを取り入れました．講師の先生方と，参加者間の円滑なコミュニケーションを実現し，オンライン開催の強みを生かした臨場感あふれる時間を提供できました（図2）．

このシンポジウムは第一部・第二部ともに大いに盛り上がり，参加者からも好評でした．将来を多角的に見つめ，キャリアに関する気付きを得るとともに，モチベーションの向上にも役立つプログラムとなったと考えています．

個性に満ちた参加者交流企画

分野の垣根を越えた交流，研究紹介や意見交換を行う場の実現を目指し，さまざまな企画を実施しました．特に今年は「祭り」を意識し，参加者の皆さまに個性を発揮していただけるよう努めました．

まず，第64回夏学のオープニング企画として，「フラッシュトーク」を行い，すべての夏学参加者が自己紹介・研究紹介に留まらず，自由に語る機会を設けました．「自由集会」では，参加者それぞれが持ち寄った個性的なテーマについて意見交換を楽しみました．本年度は株式会社アカリク様にご協力いただき，企業就職について話すブースも用意しました．研究成果を発表する「ポスターセッション」では，約60名という想定以上の発表者が集まり，大変盛り上がりました．夏学の前夜祭として開催された「Journal Club」では，ワークショップの講師の論文を読み解く経験を通して，ワークショップの理解を深めることはもちろん，自らの専門と異なる分野の論文に触れる機会となり，多くの参加者から好評の声を集めました．

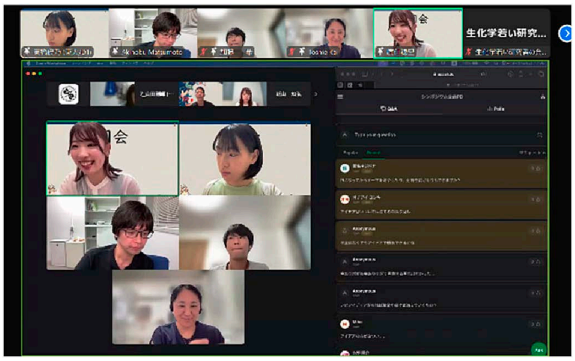

図2　参加者からの声（右）を拾いながらパネルディスカッションを進める様子（左）

おわりに

今年度の夏学は，64年間にわたる夏学の歴史上，初の九州開催（長崎）を予定しておりましたが，遠方からの参加者を含め，150名の申込をいただきました．当日は急遽オンライン開催に変更となったものの，オンラインツールを駆使して柔軟に対応することで，臨場感をもって盛況のうちに終えることができました．「集え!! 祭りだ!!」のコンセプトを表現して制作した多彩なグッズについても，オンライン販売を通して，多くの参加者に届けることができました（図3）．

以上のような活動により生化学若い研究者の会は，若手による生命科学研究の振興に貢献しています．また，夏学の他にも，全国でセミナーを開催する「支部会」や羊土社『実験医学』誌にて若手の意見を伝える「キュベット委員会」活動も行っています．これらにより「研究者ネットワークの拡充・次世代人材の育成」を目指します．来年度の第65回 生命科学夏の学校は，「書を置いて，街へ出よう」というコンセプトのもと開催予定です．本稿を御覧いただき，興味を持たれた皆さまも，すでに常連の皆さまも，是非足をお運びいただけますと幸いです．

最後になりますが，本年の夏学開催にあたり多大の支援を賜りました日本生化学会をはじめとする法人・企業・団体・個人の皆様，またお忙しい時期に講演を承諾していただきました講師の先生方，そして1年間準備に携わっていただいたスタッフの皆様に感謝申し上げます．（生化学若い研究者の会・第64回 生命科学夏の学校について：http://www.seikawakate.org）

図3　予行演習のために長崎に集った第64回夏学スタッフとグッズのタオル（2024年6月）．学部生から助教まで幅広い年代の若手研究者が本業の合間をぬってのびのびと活動しています．